

## 武田常蔵さんという人

武田常蔵さんは明治十七年（一八八四）六月二日に奥湯谷で生まれました。子ども時代はいたずら好きで元気が良かったという。八才になると上阿井川西尋常小学校に入学した。よく勉強して学業成績は他の子どもより優れていたようだ。続いて三成村にあった仁多郡七か村組合高等小学校に入った。村でも僅かな子どもしか入ることができなかった。この頃はバスなどもなく毎日阿井と三成間を歩くしかなかった。二里三里の道を徒歩で往復することは並大抵の努力ではできなかったが、常蔵さんは休むことなくよく通った。

基礎教育を終わった常蔵さんはその後、島根県蚕業講習所に入り、卒業後蚕業巡回教師となり、村の養蚕の指導にあたった。阿井村農会技師兼書記にも任じられて多忙の日々を送った。

その後日露戦のために出征した経験もはさんで、大正三年頃には仁多郡道路技師兼土木技師となって郡役所に勤めていた。

常蔵さんは若い時から進歩的な性格を持っていた。このため稲作に金肥を使って産米の増産を計ったり、「モートル」と「精米機」を使って精米することにも取り組んだ。

本職の土木事業では、村内道路の新設や改良、河川の手入れ、堤防の構築などを行い、村のために大いに奔走した。

常蔵さんが村に残した業績は数多くあるが、最大の功績は川東水路を造ることを立案して完成させたことである。（No.9で紹介済）

この川東水路をつくって雲崎や奥湯谷に水を取り入れ災害を防ぎ併せて付近の荒地を開墾して美田をつくり上げる案は、長瀬太五郎、

川角傳八郎、下阿井の響理太郎の三氏によって提唱されたものであるが、その困難さゆえに実行に移すことができなかった。

この事情を知った常蔵さんは何とかしてこれを実現したいと、長瀬富之助、川角源六、藤原栄三さんたちと協議し、雲崎の高台に水を引くためには遠く真地付近に取水口を設けなければならぬこと、その水を阿井川の右岸地区でどこを通して八キロあまりの水路によって雲崎、奥湯谷まで導くかということについて案をねった。そして実測の結果、一理松（真地橋上流二百米）付近で阿井川を堰き止め、阿井川右岸にあたる山腹をイザナミ谷に導きサイフォン工事によって上阿井町東側の山腹を通し、小谷奥、雲崎、奥湯谷に至る通路を選定した。

この水路となる大部分の用地は櫻井家の土地であったため、長瀬富之助さんを中心に櫻井家当主と折衝の末水路用地を借り入れることに成功した。常蔵さんはその後工事の許可や補助金を得るために上京すること数回に及び、時の首相若槻礼次郎氏や岸清一郎博士等の援助を得て着工に至るまでのすべてに奔走した。藤原栄三さんは仁多郡役所の書記として公職にあったため、工事に関する各種書類の調整等万手うまく取り計らった。

この工事は昭和三年（一九二八）五月に組合を組織して以来九年後の昭和十二年（一九三七）には完工して通水することができた。

川東水路の完成によって小谷、雲崎、奥湯谷それに堀、開崎付近に亘る水田約六十町歩を潤し、又新田の開拓に寄与した。



川東水路頭彰碑